# 妖カフェ

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖カフェ

【Ｎコード】
Ｎ３８０９Ｚ

【作者名】
翳鴉

【あらすじ】
裏と表じゃ性格が全然違う少女、響。だけどある日、学校の帰り。とても素敵なカフェを見つけて…。

## 登場人物

麗亜（れいあ）　響（ひびき）
高校１年生の女の子。
表＝明るくて優しくて元気で誰にでも優しくてよく笑う。
裏＝臆病で強がりで弱虫で泣き虫。
他人と関わるのが本当は苦手。
両親とも、うまく行っていない。

天城（あまぎ）　雫（しずく）
高校２年生の男の子。
明るくて優しくて元気で鈍感。
妖の血を引く。
『華陽』というカフェで仕事をしている。
響と一緒の学校で喋った事は一度も無い。

松田（まつだ）　飛樹（ひき）
高校１年生の男の子。
無口で暗くて冷たくて本当は親切で優しい。
妖の血を引く。
『華陽』というカフェで仕事をしている。
響と一緒のクラスで一度も喋った事が無い。

皐月（さつき）　露依（ろえ）
２０歳くらいの男の子。
明るくて元気だけどチャラくて女ったらし。
妖の血を引く。
『華陽』というカフェの店長。
女ったらしの達人？

鬼河（おにかわ）　臨（りん）

高校1年生の男の子。
生意気でちょい冷たいけど照れ屋。
妖の血を引く。
小さい頃の記憶が無い。
『華陽』というカフェで仕事している。

## 1杯　始まりのカフェ

「麗亜！バイバイ！また明日ね！」ニコッ
「うん！バイバイ」ニコッ
麗亜響（れいあひびき）それが私の名前。
だけど皆、”麗亜”って言う。

チャリンッ
「！？…。」
鈴の音が聞こえる。
「にゃー。」
黒い猫が響を見ていた。
黒猫は走り出す。
「待って！！。」
響は黒猫を追った。

そして、ある一つの道に来た。
「静かな場所…甘い匂い？。」
チャリンッ
「あっ！待って！」
とその時…

ドンッ！！！！
「えっ！？」
「痛ッ！！！！！！！」
響の頭がドアとぶつかった。
「大丈夫？君、ごめんね！」
「大丈夫です…。」ニコッ

「お店に入って、休む？」
「…あっえっと…いたたたたた。」
「ごめんね、まぁ、寄って行ってよ」ニコッ
「はぁ…分かりました。」
響はお店の男らしき人とお店に入る。

「まだ、開店前だけど。」ニコッ
カランッ
「店長、どうかしたんですか？」
「…誰ですか、その人？。」
「あっ…扉を開ける際にぶつかって、怪我させちゃって、ちょっとお店で休まそうって。」ニコッ
「ぅ…たたたたた。」
響は店にあるソファーに座る。
「本当にごめんね、大丈夫？」
「はい…ご心配なく、大分マシになってきたので…。」ニコッ
「そうだ、俺はこの”華陽（かよう）”というカフェの店長の皐月露依（さつきろえ）よろしくね」ニコッ
「あっ、私は、麗亜響（れいあひびき）と申します！」ニコッ
響は慌てて、自己紹介をする。
「響ちゃんか、可愛い名前だね」ニコッ
「そうですか？ありがとうございます」ニコッ
「出たよ、露依さんの色気モード。」
「ほっとけば治るだろう？」
「……。」
「何？何？俺をそんな顔で見つめない。」
露依は店の人には信頼されている。

「私、もう帰ります。いろいろすみませんでした。」
「…。」

響が帰ろうとする。
「響ちゃん！」
「はい？なんですか？」
露依が響を引き止める。
「可愛い…。」
「！？…。」
露依が響に抱きつく。
「店長！」
「ごめん、ごめん。可愛すぎてつい抱きついちゃったぁ～」ニコッ
「…あっえっと…失礼しました！！」ペコリッ
響は慌てて店から出て行った。

「店長、どうする気ですか？」
「あの子にちょっと興味がわいたんだよ」ニコッ
「…悪い癖。」
「で、抱きついた理由は？」
「バレてた？。」
「当たり前ですよ！！」
そして、店長は生徒手帳を出した。

「店長の？」
「響ちゃんのだよ、えっと皆、同じ高校だよね？響ちゃんも同じだから
明日の放課後、ここに連れてきてくれないかな？」ニコッ
「何してくれる！？」
「俺が別にいいですけど…。」
「…金。」
「じゃあ、連れてきてくれたら響ちゃん付きで焼肉でも行きますか？」
「よっしゃ！！！！」

「…何か、楽しそうなカフェだったなぁ～」ニコッ

## 2杯　アルバイト決定？　1

そして、気ままに次の日がやってきた。

「じゃあ…行って来ます。」

ガチャッ

響は家を出た。

そして、ポストの中身を見た。

「ん？…。」

赤い封筒が入っていた。

中身を見てみると。

『麗亜響様へ

昨日は何かとごめんね！！

今日もまたカフェに来てくれると嬉しいな！

皐月露依より。』

「露依さんから？今日もカフェに…どうしよう？」

響は手紙をかばんに入れて、気ままに歩いていた。

「麗亜！おはよー！！」

「おはよう！！」ニコッ

響はいつもより、とても明るかった。

「あれ？生徒手帳がない！！」

「麗亜、それはまずくない？この私立学園は生徒手帳が無いと入れないよぉ～どうする？」

「どうしよう…。」

響はかばんをあさる。

「はぁ…ないよ。」

「なぁなぁ、麗亜響って知ってる？」

「響ー出て来いよ！！！」
「！？…。」
「…居た。」
「おぉ！ナイス！飛樹（ひき）！」
響の前には昨日、カフェに居た人達だった。

「…えっと…。」
「ほれ、生徒手帳。」
「あっ…。」
「…昨日店に忘れてた。」
「ありがとうございます！！」
「別に、たいしたことはしてないからな！！」
「臨、顔真っ赤。」
「何！？」
三人トリオって感じ。
「ありがとうございます！！本当に、ありがとうございます！」ニコッ
響は生徒手帳を手に持ってかばんを持って、学園に入る。
「俺等も入るか。」
「そうだな！」
「……。」

ガシャンッ！！！！
ビクッ！
「！？…。」
「ん？」
「どうかしたのか？臨。」
「いや…なんでもない！」ニコッ

あいつ、今物音だけしただけなのに、何であんなに怯えているんだ？

そして、放課後。
三人トリオは、学園の外で響を待っていた。
「って、何で、飛樹も臨もクラス違うんだよ！！」
「知るか！俺に聞くな！！」
「…同じく。」
「それにしても、遅いな、響（あいつ）。」

響は教室に居た。
自分の席で窓から空を見上げていた。
ガタッ
「……。」
響はかばんを持って、教室を出た。
そして、響が門を出ようとする。

パシッ！
「！？…。」
「「「見つけたぞ。」」」
「えっ！？」
そして、三人トリオに強引に響がカフェに連れ去られる。
カランッ
「店長ー！！」
「なんですか一体！？」
響はパニックだった。
「響ちゃん。」
「露依さん！」
「響ちゃん、華陽（うち）で働かない？」
「えっ！？」
「そう言う事か。」

「はめられたぜ。」
「…同じく。」
「えっ！！！！！！！！！！」

## 3杯　アルバイト決定？　2

「えっ！！！私がですか？無理ですよ！！。」
「大丈夫だよ、皆教えてくれるし」ニコッ
「…えっでも…。」
「やればいいだろう。」
「えっ？…。」
「やっていいとおもうよ、俺も教えるし！」ニコッ
「…同じく。」
「！？…あっじゃあ…よろしくお願いします。」
「うん！よろしくね、響ちゃん」ニコッ
響は”華陽”で働く事になった。

「あっ、改めて、麗亜響です！よろしくお願いします。」
「店長の、皐月露依。よろしくね」ニコッ
「天城雫（あまぎしずく）よろしくな！」ニコッ
「松田飛樹（まつだひき）…。」
「鬼河臨（おにかわりん）よろしく頼む！」
「今日から、入れる？」
「一応…。」
響は不安だったが、楽しさという気持ちもあった。

「だけど、店長、制服なくないか？」
「それがあるんだよねぇ～」ニコッ
「マジか！」
「お前の反応は面白いな、雫。」
「…まったく笑ってないけど…。」
「はいはい、この三人トリオは置いといて、着替えてきてくれるかな？」ニコッ

「分かりました…。」
響は奥の部屋にあるカーテンで着替えた。
「……頑張らないと…。」
タッ
「ぉ…お待たせしました。」
「！？…。」
「うわぁ…。」
「なっ！！」
「……。」
「そんなに、見られると困るんですけど…。」
４人とも、顔を真っ赤にしていた。
飛樹はちょっと頬を赤めだった。
「響ちゃん、可愛いね！よく似合ってるよ」ニコッ
「なっ！！！！！！」
ボンッ！！
響は顔を真っ赤にして、頭から湯気が出る。
「店長、いじめないでくださいよ。」
「露依さんの癖。」
「…マジない。」
「じゃあ、接客とかできるかな？」
「…一応出来ると思います！！」
「そっか、こっちもいろいろサポートするから、大丈夫だよ」ニコッ
「ぁ…ありがとうございます…。」
ドキッ！
何でこんなに可愛いんだ！
「…響さん…。」

「はい？」
「…敬語じゃなくていいし、君付けとかいらない。」
「あっうん、じゃあ飛樹って呼べばいいよね」ニコッ
「…うん。」
「じゃあ、私も響でいいよ」ニコッ
「…分かった。」
「じゃあ、店開けるよぉ～」
そして、店は開いた。

「いらっしゃいませ」ニコッ

だけど、ここのカフェは女性が多い。
まして常連さんは皆店員目当てで来てる感じ。
そして、響は嫌な目で見られている。

「何？あの子、バイトの子？」
「どうせ、あの子も店員目当てなんでしょう？」

「……。」
女性の客が響の目の前にコソコソ話す。
ガタッ
「ねぇ、あんたさ、どうせここの店員目当てで入ったんでしょう？
ねぇ、どうなの！！」
「…！？…やぁ！」
響が耳を塞いで目をつぶる。
「何びびった不利してんだよ！！」
客が響の手をつかむ。
「！？…。」

パシッ！

「！？…。」
「…この人、店長の友人の娘なの、だからあんまり手を出さないで。」
「！？…飛樹…。」
飛樹が響を助けた。
「…飛樹君がそう言うなら本当なんだろうね、悪かったわ。」
「…あっいえ…。」
「…大丈夫？」
「えっ！？…あっはい！」ニコッ
「…そっか…。」

そして、初日のバイトは終わった。
「でわ、お疲れ様でした」ニコッ
響はバイトが終わり挨拶をして帰った。

「…響、僕が客から助けたとき体が震えてた。」
「そうなの？」
「それなら、前学校で音がしただけなのに、驚いてたな。」
「おかしいなって、敏感なのか？」
「まぁ、どうだろうね…。」

ガチャッ
「……ただいま…。」
「帰ってくるのが遅い！！！！！」
「！？…ごめんなさい！ごめんなさい！」
バシッ！バシッ！ドンッ！

私に幸せなんて来るの？…。

## 4杯　本心正直　1

「お前はいつもいつも！！！」
バシッ！パンッ！！
「ごめんなさい！お父さんごめんなさい！」
「うるさい！！！！！」
パリンッ！！！！

「お前は俺のいう事だけを聞いていればいいんだ！！！」
ガチャッ
「…痛…。」
響は肩から血が出ていた。
さっき父親がガラスを肩に刺したのだった。
ポタンッ
「…我慢すればいい…このままでいい…。」
響は泣きながら自分の手当てをしていた。
私が我慢すれば、家族の中はちゃんと行く…大丈夫。
「ぅ…ごめんなさい…。」

「麗亜？その傷どうかしたの？」
「あぁ…ちょっと、こけちゃってそのまますれちゃって」ニコッ
「麗亜はドジだね！今度からは気をつけないといけないよ。」
「うん！」ニコッ
響は自分の包帯を巻いている肩を見た。

「はぁ～…。」
そして、放課後。
「そうだ、バイト。」
響はカフェに向かった。

「こんにちわ！！皆さん！」
「おぉ、今日もよろしくね、響ちゃん」ニコッ
「…響早く着替えないと、開店する。」
「あっうん！」
「お前ら仲良くなったな。」
「本当だな。」
「響ちゃん、その包帯どうしたの？」
「あっ…階段からころんじゃってそのまますっちゃいました」ニコッ
「大丈夫？無理はしないでね」ニコッ
「はい！」ニコッ
響はバイトの服に着替える。

そして、着替えているときに響の携帯がなった。
「！？…。」
「響ちゃん？携帯なってるよ。」
「あっ…置いといて下さい。」
「だけど、お父さんからだよ？」
「！？…大丈夫です…後で電話しなおしますから。」
「そう？ならいいけど。」

後で…電話すれば大丈夫だよね？…。

ガラッ
「じゃあ、皆今日も頑張ってね」ニコッ
カランッ
「いらっしゃいませ！」ニコッ
大丈夫…後で電話すれば…。

「響ちゃん、休憩１０分ね、お腹すいてない？」
「えっ…少々…。」
「じゃあ、雫、後は三人でやっとくから、休憩入って。」ニコッ
「了解っす。響。」
響と雫は奥の部屋で休憩を取る。
「ケーキと紅茶でいいか？」
「あっうん！」ニコッ
「了解。
響は自分の携帯を見た。
「！？…。」
着信がすべて、父親だった。
そして、電話が鳴った。
「！？…あっはいもしもし？…。」
響は出た。
「響か？今どこに居るんだ？。」
「あっ…お父さん？今…ちょっと。」
「どうかしたのか？」
「私ね、バイト始めたんだ、お父さんに言うの忘れたごめんなさい。」
「そうか、バイトを始めたか、なら毎日帰ってくるのが遅くなるな。」
「うん、ごめんなさい。」

電話をしているときに雫がケーキと紅茶を持ってきた。
「お父さん、今日ケーキ持って帰って来るね」ニコッ
「あっ、じゃあ楽しみに待ってるよ」ニコッ
「うん、バイバイ。」
そして、電話は切れた。
「親からか？」
「はい！」ニコッ
「そうか、早く食べようぜ。」ニコッ
「はい！」ニコッ

なんだ、虐待じゃなかったなら…良かった。

「…おいしいです！」ニコッ

私は”幸せ”ではないと自分自身で思う…。

## 5杯　本心正直　2

ガチャッ
「お父さん、ただいま」ニコッ
「おかえり、響！！」
バシッ！
「！？…。」
グイッ！
帰ってきて早々、頬を殴られる。
手を引っ張られる。
「お前はもう、要らない！死ね！」
「！？…。」
そして、父親は風呂場に来る。
そして、響の頭を持って、つっこむ。

「！？…グッ！！…。」
響は溺れていた。
バシャッ！
「…ゲホッ！ゲホッ！…ぅ！」
「死ね！お前なんか死ねば良い！俺の許可なくバイトをするな！！」
「ゲホッ…ごめん…なさい…ゲホッ！…グッ！」
「口答えをするな！」

「ハァ…ハァ…ゲホッ…。」
響は風呂場で倒れていた。
服はビショビショ、体や顔に傷や血が出ていた。
「…ぅ…。」グズッ

響は涙を流した。

怖い！…痛い！…苦しい！…違う！！。

≪何を怖がるの？≫

分からない。

≪父親が怖いの？≫

違う！

≪痛い？父親に暴力を振られて？≫

違う！！

≪苦しい？父親が狂ってしまって？≫

違う！！違う！！やめて！！

≪父親も狂ってるけど、あんたも狂ってしまっている。≫

！？…。

ハッ！！

「！？…ゲホッ！ゲホッ！…。」

響はビショビショのまま、部屋に行く。

そして、服を着替える。

「……。」

そして、傷を手当てをする。

「お父さん、どこに行ったんだろう？」

響が風呂場に居る間、父親は居なくなっていた。

「…お父さん…。

そして、響の携帯が鳴る。

「ん？…はい？」

「あっ、響ちゃん？今大丈夫？」

「あっ、店長！はい、大丈夫です！」

「今、響ちゃんの家の下にいるんだけど？」

「えっ？家の下ですか？…。」
響は部屋の窓から外ののぞくと、露依が響に手を振る。
「今から会える？」
「あっ…ごめんなさい。今日はちょっと…。」
「だけど、皆で出かけようって話になってね。」
「！？…。」
行きたい！…だけど…。

「響ちゃん？…。」
「あっ…えっと…。」
「ん？」
「行きます！！」
「そっか、じゃあすぐ下来れる？」
「はい！」ニコッ
響は準備をした、そして家の鍵を閉めて、店長達と出かけた。

「響…俺の響！どこだぁぁぁぁぁぁ！！！！響！！！！！！！」
父親が帰ってきて、家を散らかし暴れていた。

「お前は一生俺の物だ。」

## 6杯　本心正直　3

”ごめんなさい。”…私はあなたと居る事がとても怖くなりました。
だから、私は…”妖怪”と暮らす事にします。
サヨナラ…。

「響ちゃん、盛り上がってる??」
「はい!!」ニコッ
カフェの皆でカラオケにきていた。
店長はもうすっかり、テンションあげあげ。
「……。」
響は携帯を見る。
着信なし、受信もなし…かぁ…。まだ帰ってないのかな?

「響、お前歌わないのか?」
「えっ?雫君が歌っていいよ」ニコッ
「俺はいいの、お前歌えよ。」
「…歌えるかな?」
「大丈夫だよ。」
響はマイクを渡され、ステージに立つ。

「…見つめてる、君の顔を。恋しちゃった私だもん。」♪

ドキッ!!!!

男子全員、頬を赤く染める。
「歌うますぎじゃんか。」
「…同じく。」
「べ。別に俺はうまいとか思ってないしな！！！」
「はいはい。」
そして、響の携帯がなった。
「すみません。」
響は部屋から出て、電話に出る。

「…もしもし？。」
「響！どこに居る！！！！！」
「！？…お父さん…。」
「早く帰って来い！！！お前は俺なしじゃ生きていけない！帰ってきたら罰だ！」ブチッ！
「！？…。」
カタッ
響は携帯を落とした。
そして、座り込んだ。
カランッ
「響ちゃん？」

怖い！…殺される！…怖い！！！

「響？」
響の体は震えていた。
「…あっ…私、もう帰ります！。ありがとうございました。」
響は荷物を持って、帰ろうとする。
バシッ！
「！？…飛樹、離して…私帰る。」
「…怖いなら帰らなくても良い。」

「！？…。」
「…そんなに体を震わせて怖いんだろう？」
「！？…怖くなんか…ないもん。」
「……。」
「私は…強いもん…。」

≪怖い！≫

「…そんな、泣きそうな顔でよくそんな言葉がいえたな。」
「？！…。」
「助けてほしいなら言えよ！響！」
「！？…。」
「お前がどうしてもって言うなら、助けてやるよ！！」
「！？…ぅ…。」
「響ちゃんは一人じゃないよ」ニコッ
「ぅ…ぅ…怖い！…一人じゃ不安で…だけど…そんな事を思ってるととても辛い！！…。」
響は泣きながら自分の本音を話す。

「助けてほしい！…ぅ…助けて…ぅ私は死にたくない…。」グズ
「…僕が守るよ。」
飛樹は優しく響を抱きしめた。
「！？…。」
「行きますか？」
「そうだな！」
「…久々。」
「皆、なまってないよね？」
「あったり前！」
「？…。」

ガチャッ
「…ただいま。」
「響！！！！！！」
「！？…。」
「来い！」
「？！…。」
バシッ！ドンッ！ガシャンッ！バチーンッ！ダンッ！！
「…ごめんなさい！！。」
「許されると思っているのか！！」
「本当にお前は！！！！」
父親がとても暑いお湯を持つ。
「！？…嫌！…嫌！！！！！！」
バシャンッ！！
「？！…。」
「…父親が娘を虐待か。」
「！？…なんだお前ら！！！」
「…なんだお前ら！！」
「…僕は、妖狐の飛樹。まぁ、妖怪。」
「なんだ！！」
「…はぁ…人間だからってあきれるな。」
「！？…。」
父親は透明な檻に閉じ込められる。

「クソッ！出せ！！」
「…響は僕達が貰う。」
「！？…駄目だ！！」
「お父さん…。」
「…じゃあなぜ、傷つける！こんな姿を見ても何も思わないのか！！」
「…俺だってな…こんな事…したくないんだ。」

「お父さん…ごめんなさい。私は、お父さんの理想の娘になれません。
私はあなたと居る事がとても怖くなりました。
だから、妖怪と暮らします…サヨナラ。」
飛樹が響を担ぐ。
「!?…響!!!!!!!」

「…ごめんなさい…。」
響の目には、涙が溢れていた。

「飛樹、これからよろしくね!」ニコッ
「…お前のままでいいと思う。」
「!?…そっか…ありがとう。」

## 7杯　住む家

あの日、私は家から出て行った。
”お父さん”と言う存在を残して。
そして、新たに知った事。
それは、カフェの皆が”妖怪”だと言う事。
そして、昨日は家を出た後、カフェに泊まりました。
そして、今日、私の住む家を決めるらしいです。

「で、どうする？」
「俺は、一人暮らしだ。」
「知ってるよ。」
「俺は、寮だぜ？露依さん。」
「それも知ってる。」
「…両親居る。」
「それも知ってる…。」
「…ごめんなさい。私のために…。」
「あぁ！！響のせいじゃないって！！！」
響は不安な顔をする。
「…響、僕の家に来る？」
「！？…。」
「そんじゃ、俺の家に来い。」
「学園の寮でも使えばいいだろう？」
「えっと…私、カフェで寝泊りしますよ？」

「「「「それは駄目！！！！」」」」
「はぅ！…。」
なぜか、４人ともカフェ寝泊りするのは全否定する。

グイッ
「…僕の家に来てよ。」
「えっ？飛樹？」
「…僕の家は、部屋がいっぱい余ってる。」
「そういえば、飛樹の家は金持ちだからね」ニコッ
「そうなんだ。」
「飛樹、ずりぃーぞ。」
「雫の家は小さいから、やめた方がいい。」
「なっ！！！。」
「俺の寮は広いけど、二人部屋。まぁ、俺は一人だけど。」

そして、響の住む家は決まった。

「いいのかな？本当に？」
「両親には、もう連絡したから大丈夫。」
「そっか…。」
道中を二人は隣あわせで歩いていた。
「……。」
「響。」
「何？。」
「手、繋いでいい？」
「えっ？うん！」ニコッ

二人は手を繋いだ。
「冷たい、人の手はこんなにも冷たいのか？。」
「それはどうだろうね」ニコッ
「…響、僕が怖い？。」
「どうして？」
「あんな人間でもない僕が…。」
「…そんな事無いよ、飛樹は飛樹でしょう？私はそう思うよ」ニコッ
「……。」
グイッ！
「えっ！？…。」
飛樹は響を抱きしめる。
「飛樹？…。」
「響、ありがとう。」
「……。」

タッ
「見つけた。響。」

# 8杯　陰陽師少年

パチッ
「ん？…。」
朝、響が目を覚ます。
トンットンッ
「はい？…。」
「失礼します。響様、朝食の用意が出来ておられます。」
「あっ…はい！今いき…キャァ！！」
ドンッ！！
「大丈夫ですか？」
響が焦りすぎて、ベッドから落ちる。
「…はいぃ…。」
そして、リビングに行くと、飛樹とその両親が居た。
「キャァァァァ！！可愛い！」
「えっ？」
「可愛い！！！やぁぁぁ！！飛樹のお嫁さん？」
「えっ！？」
「母さん、響が困ってる。」
「母さん、一旦落ち着こう」ニコッ
「あっ、ごめんね響ちゃん」ニコッ
「…はぁ…。」
響は椅子に座る。
「響ちゃん、普通に食べていいからね」ニコッ
「ありがとうございます。」ニコッ
響はご飯を食べる。
「おいしい？」
「はい、おいしいです」ニコッ
「そう？良かった。」ニコッ

居なかったな。こんな暖かい家族が。
私の家族はいつも冷たかった…。

「響、学校もう行こう。」
「あっうん！」
飛樹と響はかばんとお弁当をもって、学校に向かう。

「行って来る。」
「行って来ます。」
「いってらっしゃい、二人とも」ニコッ
「いってらっしゃい響ちゃん！飛樹！」ニコッ
飛樹の両親が笑顔で送ってくれた。

「飛樹の両親は優しい人だね」ニコッ
「そうかな？ただちょっとウザイだけでしょう？。」
「そうかな？」
タッ
「響！」
グイッ！！
「！？…。」
ガシャンッ！！！！
響と飛樹の目の前に車が突っ込んできた。
「大丈夫か？響？」
そして、響を助けてくれたのは、一人の少年だった。
「えっと…ありがとうございます。」
そして、響は立ち上がる。

「響。」
「…なんで私の名前を？…。」
「覚えてないか？俺の名前は『神夜咲螢（かみよざきけい）』。」
「螢？…。」
響の目の前には響の知り合い的な感じの人だった。

「響。俺の事はいいけど。あんまり妖怪に近づかない方がいい。」
「えっ？…。」
グイッ！
「？！…。」
「そいつもの妖怪なんだろう？」
「！？…えっ？」
「！？…。」
いきなり、飛樹の正体がばれた。
僕の正体がばれた？…。
ドクンッ！
「！？…。」

≪響、俺は。≫
＜ありがとう、螢お兄ちゃん！＞ニコッ

「螢…お兄ちゃん…。」
「響、思い出したのか？」
「誰だ？…。」
「俺は、陰陽師。陰陽師の神夜咲螢だ！」
「！？…。」

陰陽師！！！！！

## 9杯　結構鈍感陰陽師？

「螢…。」
「と、俺は妖怪探してくるから、じゃあ！」
「えっ！？」
「ん？なんだ？」
「あっえっと…。」
「ん？」
「私に近づいてる妖怪とかどうとか言ってたけど、どういう？」
「あぁ、あれは単語を間違えた。」

何！！！普通間違えるか？？

「じゃあな！」ニコッ
「うん！」
そして、螢はどこかに行った。
「…あいつ、鈍感なのか？」
「さぁ～…記憶があいまいなんだよね。螢の時だけ。」
「ふ～ん…。仕事行くぞ。」
「うん！」ニコッ
そして、二人はカフェに着き、仕事の準備をする。

「で、どうかしたの？」
「…店長、気をつけたほうがいい。」
「何が？」
「私の友達に陰陽師が居るんです。」
「！？…。」
「そっか、じゃあ皆妖怪になるのは少し避けようか。」ニコッ
「へーい。」

「ごめんなさい。まさか来るとは知らなくて。」
「いいよ、響ちゃんのせいじゃないでしょう？」ニコッ
「ありがとうございます。」ニコッ
そして、店は開店し、いつもどうり満席だった。

カランッ
「いらっしゃいませ。」ニコッ
「響？…。」
「えっ？…螢？」
そして、周りは騒ぎ出す。
「あの子、可愛いわ。」
「話しかけない？」
皆螢を見て話す。

「お前、ここでバイトしてるのか？」
「そうだよ、螢、どうしてここに？」
「妖の事で調べ？。それでいろいろ店を廻ってるんだ。」
「そうなんだぁ～じゃあ、お席へ案内します。」
「！？…おぉ…。」
響が螢を席に案内する。
「あっ、響。店長さんを呼んでくれないか？」
「うん、注文も店長に言ってね」ニコッ
「了解。」
そして、響は店長を呼ぶ、店長は螢の席に行った。

そして、奥の部屋に帰ってくる。

「店長、どうでした？」
「ぅ～ん、この頃この辺で妖が現れるらしい。
そして、人間を襲ってるらしいね。」

「！？…。」
「という事で、皆団体で帰ろうね」ニコッ
「はーい。」
響は不安だった。
「響ちゃん、大丈夫だよ。」
「いつでも守ってやるからな！」
「お前く、くらい守れるし！」
「…任せろ。」
皆響を守ってくれると言ってくれた。
「ありがとうございます！」ニコッ
響の不安は晴れた。

「ふ～ん、あの子が響ちゃんかぁ～」ニヤッ

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3809z/

---

妖カフェ

2011年12月19日18時50分発行